



# T S し ょ と す と り ー ず

著者 山嶺  
表紙イラスト ささみ



山嶺 Sanrei prof.

千葉県生まれ千葉県育ち。  
中学生の頃に「アイドルプリテンダー」を読んでTSモノにハマる。シチュとしては変身や肉体変化が好き。性転換過程やシークエンス描写がある作品がグー。幸せに終わる作品が好きだが悪堕ちも好き。TS以外では日常系作品も同じ歴ぐらい長く好きで、「ひだまりスケッチ×ハニカム」がハマったきっかけになっている。  
他の趣味はニジガク、ウマ、野球や旅行、温泉など。消しゴムはんこ製作もぼちぼち取組み中。  
最近酒カス扱いされて泣いてます…





えへへ...

女になった俺のぶっばい  
めっちゃでけえい

イケないこと、して











---

---

TSショーとすとーりーず

---

山嶺

---

---

## 目次

- 妖艶グラスに魅せられて 007  
イラスト ささみ さん
- 不思議な競泳水着 025
- 可愛くなれる入浴剤 037  
イラスト 竹中たむ さん
- ゆるふわセカイへの誘い 051  
イラスト ささみ さん
- TSゲームブック！ 065  
イラスト きゅんもふ さん



---

---

妖艶グラスに魅せられて

---

---

「中谷くん、頼み事なんだけどこの資料を職員室まで出しに行ってきたくないかな？」  
「了解です神山さん！早速行ってきます！」

そう言うど彼は資料をせっせと手に取り、生徒会室から足早に職員室まで走りに行った。  
今日は土曜日だが期限が近い仕事が付いていないため、会長である僕と副会長である後輩の中谷くんの二人で生徒会の作業をしている。

他のメンバーも集めようとは思ったが、そこまで多くの量があるわけではないし、休日に学校に来てもらうのは憚られたのでこうして二人がかりでチマチマと片付けていた。まあ仕事もさっきのもので全て終わったし予測は正解だったのだが。

「せっかくだし彼が帰ってくるまで部屋の整理でもしてみるか……最近はずんずん片付けられてなかったし……」

そう思うと僕は軽く体を伸ばしてアルミ棚や机に雑に積まれた様々な資料を整理し始めた。

種類や年代ごとに区別していく作業は地味であるが、最初は面倒臭いと思いながらもやっけていくうちに案外楽しくなってきたりする。

整理を始めてしばらくしたうちに、資料の山に埋もれていたメガネケースを僕は発見した。ピンク色をしたそのメガネケースを開けてみると赤ぶちのメガネが入っていた。ケースとメガネの雰囲気を見るにどうも女物っぽい。

「誰かの忘れ物か？でも生徒会でメガネをつけているのは男女含めて自分だけだし……いったい誰のものだろう……？」

僕は怪訝な目でそのメガネをじっと見つめる。資料整理に戻ろうとしてもどうもそのメガネが気になって仕方がない。何とも言えないがメガネから人を惹きつけるオーラが漂っているような……そんな気がした。

完全に作業の手を止めてしまった僕は、そのメガネに手を伸ばして自分のメガネと入れ替わりで付け直した。

「あはは……似合っていないよな……」

窓ガラスに映った自分を見てそう呟く。しかし、また何か別の違和感を覚えることになるのはすぐのことだった。

「あれ？おかしいぞ……なぜ赤の他人のメガネなのに自分のやつと度数がピッタリなんだ……？それに自分の目ってこんなにパッチリしてたっけ……」

そこまで気が付いた途端、体に急に強烈な違和感が襲い始めた。

首の長さ位までだった髪の毛が腰のあたりまで一気に伸びていく。

思わず触ってみるとサラサラとしていて触り心地がとても良く、伸び終わると隙間風によってしなやかに靡いた。

胸の底からなにかふつふつと感じたと思ったら、グングンと盛り上がっていく。

抑えようと思つて上から強く押し付けても止まることはなく、むしろ勢いを増して膨らんでいき、とうとう勢い負けして手を離してしまった。

最終的には自分が今着ている制服の上からでもわかる、強く主張するほどの膨らみまで成長した。

「もしかして女の子に変わっているのか……!?!」

自分がそう確信したあとも体の変化はさらに続く。

体に少し生えていた毛の感覚がなくなつたと思えば、肌が白くきめ細やかになっていく。お腹が括れていく一方で太ももは肉感を増していき、立っている姿が徐々に内股になつていった。

そして変化は局部にも及んでいく。

慣れ親しんでいたモノがスルスルと中に吸い込まれていく感覚を覚えると、平らになつたのか中からヒンヤリした感覚が襲つてきた。

「ははっ、嘘だろ……」

窓ガラスに映っている姿を見ると、面影を残しながらも美少女になつた自分の呆然とした姿がそこに映っていた。

しかし、まだ変化は終わらない。

肌に違和感を覚えたと思えば、かなり大きく膨らんだ胸を支えるような感覚が襲い、下に履いていたトランクスも平らになった局部にフィットするものに変わっていく。

足元まで長さがあったズボンが上へ上へと短くなっていく、股を繋いでいったかと思えば女子制服のピンクのチェック柄へと色が変わっていく。

履いていたソックスもニーソックスまでの長さになる。つけていたネクタイもリボンへと変わっていく、ブレザーも今の自分の体形にピッタリ合うような女子のものへと変わっていった。

やっと全ての変化が終わったところで、青みがかった黒色のロングヘアーをたなびかせながら慌てふためき、胸が指定の女子制服の上からでも分かるほどの大きさを持ち、スカートからは肉感が良く感じられる太ももによる絶対領域が眩しく感じられる、艶めかしさを持ちながらも清楚系のメガネ美少女と化した、元生徒会長の姿が隙間風の吹き込む生徒会室にあった。



「な、なんだこれは!？」

変化がすべて終わってもいまだ僕は自分が置かれた状況を飲み込めずにいた。ハッと出た声はとても可憐で可愛いものになっており、窓ガラスには自分の面影を残しながらもかなりの美少女となった姿が映っている。頬に手を当てれば前の美少女も同じく手を当て、髪の毛を摩れば同じくシンクロしている。

「やっぱり女の子になっちゃったのか……」

やっと落ち着きを取り戻し始めたところで僕は頭の中で物事を整理し始めた。

こうなったのは明らかにさっきのメガネが原因だろう。ともすればかけたメガネを外せば収まるはず……

しかしメガネを耳から外そうとしても何故か外れない。頭を思いっきり振ってみたり真ん中を思いっきりつかんで引っ張ったりしても、謎の力が働いているのだろうか微動だにしない。むしろ、なぜ無理してメガネを外そうとするのかという疑念さえ頭の中に浮かんでしまう。ただでさえ女の子に変わったのに、こうまでくるとさらにオカルトじみたようになって怖くなる。

「しかしめっちゃ可愛いよな……胸も大きいし……」

メガネを外すことをあきらめた僕は改めて自分の姿を見つめなおす。



正直言つて今の姿はかなり僕のタイプの女の子だ。ロングヘアと優しそうな眼つきから清楚さを醸し出しながらも、ブレザーとワイシャツの下から大きい胸が強く主張してスタイルの凄さを感じられてそこはかとな艶めかしさを感じられる。清楚なはずなのにスカートが短くて肉付きのいい太ももが絶対領域を主張しているのもその理由であろう。

「この身体が今自分のものになっているんだよね……」

僕は可愛らしくなった声でそう呟くと思うと、なんだか気分が高揚してきたのを感じた。「ふふっ、《私》は生徒会長の神山よ。皆さんよろしくね♪」

女言葉で呟きながらそう僕はポーズを決めてみる。そうするとますます気分がゾクゾクするのを感じる。

「私って普段は清楚ぶっているけどホントはとてもエッチなんだよ……？こんなにいっぱい大きいなら使わなきゃ《損》だよ……」

気分が乗ってきたのか変な方向へと思考が進んでいく。

しかしながら恥ずかしくなるところか、むしろその気持ちをさらに高めていきたいとさえ感じる。

(もしかしてこれもメガネの効果なのか……？でも今はどうでもいいや……♡)

頭の中がさらにピンク色に染まっていく。気が付いたら僕は学校の中だというのに制服のボタンを外し、着ていたはずの下着から可愛い柄に変化していた、大きい胸を支え

ているブラを露わにする。

そのブラをずらすと支えを失った胸が思いつきりポヨンと揺れる。生で見るとその大きさをまじまじと実感し、自然とたわわになったおっぱいを揉み始めていた。

「やっぱりすごいや……えへへっ……」

きめ細やかな手によって揉まれたおっぱいは弾力によってもちもちと揺れる。

手を動かすたびに振動で快感が伝わってきて思わず声が出そうになる。胸を寄せ合うと巨大な谷間ができてその迫力を実感し、手を思いつきり離すと反動でまた大きく揺れて快感を得ていく。

「上もやったならやっぱり下も、だよね……♡」

完全に頭がピンク色に染まった《ボク》。

自然に体を動かすと床に座って股を開き、ブラと同じく可愛らしい柄に変化したショーツの上から指で割れ目をなぞりはじめる。



「あッ……♡」

胸を揉んだ時以上の快感が襲ってきて思わず声を上げてしまった。こんなに強い刺激が来るとは正直思ってもいなかった。

「んっ……気持ちいい……♡」

脇目も振らずにひたすら続けていく。快感がクセになってしまつてヤメ時がわからない。けど何だろう……？今の時点でも十分気持ちいいのに感じる物足りなさは……  
そう思いながら身体を弄り続けていたとき、後ろから扉がガラガラと開く音がした。

「すみません！ちょっと知り合いと会つて話し込んで遅れちゃいました……」

あッ……！この声は……中谷クンだ……♡ ふふっ……やっとなつて帰ってきてくれた  
……♡

「ん？あのーすみません……どちら様ですか？ここには神山さん……いや生徒会長がいたはずなんですけど……」

どうやら《ワタシ》だと気付いてないみたい……♡ これなら尚更都合がいいや……♡  
ワタシは彼の呼びかける声に応えて、立ち上がつて振り返る。そしてすっかり火照った身体を見せつけた。



「あなたなにしてるんですか！ここ学校の中ですよ……！うちの女子制服も着てるし……」  
んふっ、焦ってる焦ってる……でもそんなこと言いながら目を背けても、ワタシの身体が気になってるのは分かってるんだから……♡

ワタシはそう頭で思い浮かべながらとろんとした表情で彼に歩み寄る。

「ワタシが誰だなんてどうでもいいでしょ……それより一緒にワタシと気持ちよくなりましょっ♡」

ワタシはその言葉をねっとり唱えながらウィンクをした。するとしっかりと立っていたはずの彼の身体がひよろつとよろける。

うっ……なんだこれ……心臓と下のほうがかなりバクバクする……それにあの人の視線を逸らせない……」

「ふふっ……我慢しないでいいんだよ♡ワタシだって我慢できないんだもん……♡」

「ダメだ……学校の教室で……ましてやこんなことは簡単にはしてはいけないのに……」

うーん……まだ葛藤しているみたいだなあ……彼の元からの真面目さとウブさが心をまだ制御してるのかなあ……

ワタシはその場から動けなくなった彼の身体に、すでにあらわになっているフカフカでおっきい《自慢の》胸をグイッと押し付ける。そして顎を手で優しく持ち上げ、彼の目を見つめながらダメのひと押しをする。

「ほおらあ……本能に素直になっていいんだよ……♡キミは何をしたいのかなあ……？」  
ワタシはとろんとした声でそう呟いてウィンクをした。

すると彼の身体から強い力が伝わってきたと思ったら、床に仰向けに押し倒されてしまった。

「もう強引なんだからあ……♡まあワタシが言えたことではないけど……」

彼の腕がワタシの胸へと伸びる。そしてガツシリつかまれたと思うと上下左右に強い力で揉まれていく。自分で揉んでいたときよりかなり強い快感が襲ってきて思っていた以上の喘ぎ声が出てしまう。

「すみません……！ダメだと思っても身体が止まらないんです……！」

「いいのよ♡それが人間としての本能なんだから……ワタシも気持ちいいし……♡」

ワタシがそう呟くと彼の動きはさらに激しさを増していく。

「あんっ……！気持ちいい……♡他人にしてもらうのがこんなに気持ちいいことだったなんて……！」

そうやって生徒会室内での彼との愛撫はしばらく続いた。

ひとしきりやったところでワタシはさらなる快感が欲しくなっていく。

ワタシの手は自然とショーツに伸び、指でまくりずらしたところですのでかなりトロトロになっていたピンク色の秘部があらわになった。



「ほおらあ……次はもつと気持ちいいことしよ……♡」

ワタシは二本の指で秘部を押し開き、彼へとアピールする。すると、彼のズボンのなかからいきり立ったモノが強い主張をする。

「へへっ……♡ワタシは《アレ》が欲しかったんだ……」

ワタシは我慢できなくなつて彼のズボンのファスナーを思いっきり下に落とす。そこからは立派なモノがポロンと出てきた。彼はウツとした声を上げる。

「んふっ……挿れていいんだよ♡多分《初めて》だよ？ワタシも《初めて》なの♡一緒に卒業しましよ……♡」

そう言うのと彼はゆっくりとワタシの中に挿れ始めた。さっきまでは力強かったのに急にウブになつちゃうのがカワイイなあ……♡

「ほらあ……強く腰を振つて……ひゃんっ！気持ちいい……そうだよ……続けて……♡」  
自分の指で弄つていた時とは比べ物にならないほどの快感が襲ってくる。押し寄せる快感で頭の中が幸せになつていく。

「もつと……♡もつと……！快感をちょうだい！！♡」

「すみません……気持ち良すぎて出ちゃいます……！ちゃんとこういうのはつけなきゃいけないって習つたのに……」

「いいのよっ♡中に出しちゃつて……♡一緒に気持ちよく《卒業》しましろうっ……♡」

その瞬間、白濁とした液体が解き放たれ、ワタシの中にみたされていった。強くてこの上ないほどの快感がワタシの頭をも真っ白に染め上げていく。

ワタシは人生一の充足感を感じたまま、すうーっと意識を失っていった……

「うーんっ……ここは……？生徒会室か……あの後ずっとこのままだったのか……なんてことをしてしまったんだ……」

未だ頭と視界がぼんやりした状態で《僕》は目を覚ました。

しかしながら、身体感覚はさっきまでとは違って十数年見慣れた自分のものに戻っている気がする。

……そうだ！あのメガネは！？

気が付けばあのメガネをつけている感覚も無くなっていた。僕は手探りの状態で自分のメガネを探す。自分のメガネを何とか拾ってかけると視界が晴れ、見慣れた生徒会室の光景が眼前に広がっていく。

……よかった。慣れ親しんだ自分のメガネだ。中谷くんは……まだ寝てるのか……

そして僕は机の上に置きっぱなしにしていた例のメガネケースの存在を認知した。

「あれ？おかしいな？出したまんまだから開けっ放しにしていたはずなのに何故か閉まってる……」

僕はメガネケースをそっと開くと、さっきまでかけていた曰くつきのメガネが入っていることに気が付いた。

「う〜ん……う〜ん……」

メガネの存在に気がついたところで、床で伸びていた中谷くんが目を覚ました。僕はとっさにメガネケースごと自分のポケットに突っ込んで隠した。

「あっ神山さん！ すいません！ 寝ちゃってみたいで……さっきまで自分が何をしてたのか全く思い出せないんです……でもなんかとてもいけないことをしていたような夢を見てたんですよ……ははっ、おかしいですよね……」

「僕もなんか寝ちゃってみたいで……ははっ……おかしいよね！」

愛想笑いと受け答えをして話を何となくの感じで流した。

（もしかしてさっきのことは全部忘れちゃってるのか……？ 自分は覚えているのに……でもこれは使えるかもしれない……♡）

かつてないほどの快感が脳裏に焼き付いてしまつて未だに強く残っているなか、いけないことなのに頭の中に描いたこれからの展望に僕は興奮を憶えずにはいられなかった。

そしてポケットにあるメガネケースからは、そのことを暗示するようなオーラが沸々と漂っていた……